

## 特集「室町・戦国時代の大磯近辺の戦い」V 武山 加根子

### V 伊勢宗瑞(北条早雲)の攻略

伊勢宗瑞(盛時)は室町時代中後期の武将で、通称は伊勢新九郎とも呼ばれている。備中荏原荘(岡山県井原市)を知行していた伊勢氏の出身で、父の伊勢盛定は第8代将軍・足利義政の側近で、母は政所執事の伊勢定国の娘といわれ、姉は駿河守護の今川義忠の正室だった。

応仁の乱の最中、文明8年(1476)、駿河守護・今川義忠が尾張守護・斯波義良(しばよしすけ)の家臣に討たれた。義忠の嫡男・竜王丸(今川氏親)が幼少だったことから、後継の守護として家臣の三浦氏らが、義忠の従兄弟にあたる小鹿範満(おしかのりみつ)を擁立した。これを支援するために堀越公方と扇谷上杉氏が介入、堀越公方執事の上杉政憲と、扇谷家の家宰・太田道灌が駿河に入国した。宗瑞は、足利幕府の命により調停の任に当たり、竜王丸が成人するまでを暫定的に小鹿範満を駿河守護とすることで決着させた。しかし竜王丸が成人しても守護を明け渡さないため、挙兵して討ち、竜王丸を元服させて、今川氏親として駿河守護に任じさせた。今川氏の支配下にありながら、伊豆韮山を拠点に駿河東部の守りを固め、さらに関東進出の機会を窺うようになった。

明応2年(1493)、伊勢宗瑞は堀越公方を倒して伊豆国の支配に成功。さらに山内上杉氏と扇谷上杉氏の争いの隙を突いて小田原城を攻略、相模まで進出した。明応4年(1495)、小田原城主・大森藤頼を追放。藤頼は真田城(平塚市真田、扇谷上杉氏の家臣・上田政盛の要害)に逃れ自害した。明応5年(1496)、真田城で山内頭定軍と戦闘。永正元年(1504)、宗瑞・今川氏親・扇谷上杉朝良の連合軍は、立川原で山内上杉頭定・憲房軍を破る。永正7年(1510)、宗瑞は高麗山及び住吉要害(山下長者屋敷)に陣を敷く。永正9年(1512)、扇谷上杉氏の家臣・上田政盛に反旗を翻させ、扇谷上杉、山内上杉両家に対して、権現山城(横浜市神奈川区)に挙兵させた。所謂、「権現山の戦い」である。両上杉軍は2万の大軍で攻め、9日間の激戦の後に宗瑞軍は敗北。同時に永正9年、宗瑞は岡崎城(平塚市)を攻略、三浦義同(よしあつ)軍を後退させる。翌年、宗瑞と義同の合戦により遊行寺(藤沢)が焼失した。



現在の小田原城

以降、伊勢宗瑞は高麗山を小田原城と相模平野を結ぶ「狼煙台(のろしだい)」及び「伝えの城=連絡用の砦」として使うこととなった。永正9年(1512)、相模三浦氏(扇谷上杉氏の重臣)攻略のため玉縄城(鎌倉市)を築城、永正13年(1516)相模全域を平定した。宗瑞の跡を継いだ嫡男・氏綱は永正15年(1519)宗瑞が没した後、姓を「伊勢」から「北条」へと改姓した。理由は、上杉氏ら関東の旧勢力から、「伊勢氏」は外来の侵略者とみなされており、相模守護だった扇谷上杉氏に代わる相模国主としての正当性を得るために、かつて鎌倉幕府を支配した執権「北条氏」の名跡を継承したものである。したがって鎌倉執権の「北条」に対して「後北条」と称されている。なお「後北条氏」は、「早雲・氏綱・氏康・氏政・氏直」と五代にわたって関東八州に覇を唱え、最盛期には240万石を領有した。内政に意を尽くし、四公六民の画期的な税制をしき、官僚の中間搾取を排除し、飢餓時には減税を施すなど、公正な民政により大衆の支持を得た。しかし天正18年(1590)、豊臣秀吉の攻略で、約100年間の後北条時代の幕を閉じた。次は長尾景虎(上杉謙信)の侵攻を採り上げる。(つづく)

【編集後記】 国指定の重要無形民俗文化財である大磯の左義長が1月12日に行われ、9基の斎灯(サイト)が燃え盛り、新年のスタートを祝いました。本号では杉本会長の新年の決意表明、今まで採り上げることのない「渋沢栄一と大磯」について奥井会員の力作など掲載しました。2月は梅の季節です。藤村の眠る地福寺の白梅の香りが春へと誘います。こゆるぎの浜は光に満ち溢れ、松並木の緑も一段と鮮やかさを感じます。私たちがこの春に相応しい企画を用意して、皆様をお待ちしております。(富田 徹)



NPO法人 大磯ガイド協会

# 照ヶ崎

第60号  
令和7年2月1日

〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯 1933-1

TEL 0463-73-8590

ホームページ

<https://www.oisoguide.com>



## 新たな年を迎えて

会長 杉本 純子

### 明けましておめでとうございます

2025年の干支「乙巳(きのと・み)」には、「努力を重ね、物事を安定させていく」という意味合いを持つ年とのことです。

本年、大磯ガイド協会は、創立25周年を迎えることとなりました。これもひとえに、行政、公園協会、観光協会、商工会、賛助会員の皆様、そして、大磯を訪れてくださいました多くのお客様、皆様からのご支援の賜物と厚く感謝申し上げます。

昨年は新たなガイドツアーとして、明治記念大磯邸園、大磯らしい潤いづくり協議会、嶋立庵、大磯迎賓館の旧木下建平邸など、各団体からお声をかけていただき旧吉田邸庭園の常駐ガイド13年間への感謝状もいただきました。これらのことは、諸先輩の方々が築いてこられたこと、会員各位の献身的な取り組みがあったからこその大磯ガイド協会の四半世紀だと思います。

「多様化する観光ニーズへの対応」「集客数アップの施策」が求められています。乙巳の新たな年を迎え「努力が実る年」となるよう、協会員一同向上心を持って力を合わせガイド活動に当たる所存でございます。皆様方のご支援ご協力をお願い申し上げます。



感謝状贈呈式(開港記念会館にて)

### 今後の企画ガイド他予定

No.	月日	企画ガイド(略称)	No.	月日	企画ガイド(略称)
1	2/2(日)	共催:吾妻山の菜の花・国府	5	3/15(土)	ガイド養成講座説明会
2	2/11(火)	会員研修「立憲政治の確立」	6	4/5(土)	春爛漫 湘南アルプス縦走
3	2/13(木)15(土)	大磯の梅の名所めぐり	7	4/18(金)19(土)	オープンガーデン巡り
4	3/6(木)8(土)	明治の群像・8人の宰相	8	5/5(月)	相模国府祭を訪ねる

## 活動報告 令和6年11月～令和7年1月

### ——企画ガイド「大磯丘陵アドベンチャーハイク」——

11月10日(日)、12日(火) お客様65名 ガイド14名

大磯町には、77群605か所の横穴墓が確認されている。大磯丘陵の小道を遮る倒木を跨いだり、下を潜ったりしながら、古墳時代後期(6世紀後半～7世紀)に築かれたといわれる横穴墓群などを巡る、「いがい」と「ふしぎ」を体験するハイキングである。

巨大な一枚岩の天井をもつ釜口古墳の岩はどのようにして運んだのか？横穴墓を掘った工人たちや埋葬者は誰なのか？などの古代の「ふしぎ」を想う。そして、山城山の横穴墓群の中に観音像や地蔵菩薩などを配するとともに、山頂に明治天皇観漁碑やあずまやを建て、町民の行楽地として開放した安田善次郎に感嘆する。また、昭和20年5月頃より終戦までの間に米軍上陸を阻止するために築かれた山城山の砲台跡や照空灯跡、



画像出典：湘南人



「いがい」にも、今も残されている羽白山洞窟式砲台を配置するための洞窟(100mの横穴)を訪れた。お客様は、一人ではなかなか行けない太古と近代の横穴を巡ったハイキングを楽しんでいた。

※総合情報メディア「湘南人」に紹介されました

(小泉 秀彦)

### ——共催ガイド「国宝如庵を模した城山庵 お茶席と紅葉」——

11月30日(土) お客様33名 ガイド5名

大磯城山公園には、かつて三井総本家の別邸があり、その東側の一角に織田有楽斎晩年の集大成といわれる国宝の「如庵」がありました。昭和45年に愛知県犬山市の有楽苑に移築され、登り窯があった場所に「如庵」を模した「城山庵」が建てられました。当ガイド協会では観光協会との共催で毎年お茶会を開いています。晩秋の紅葉の中、苔むした静けさの露地の佇まいと歴史の面影を残す小間で、一幅のお茶を用意しました。お客様は、少し緊張して躊躇り口から入り、有楽好みの工夫を凝らした小さな茶室という雰囲気の中で、亭主から差し出されたお茶を味わいます。お茶にまつわる歓談のあと、外に出られた時には、なんと和やかな気持ちでお帰りになります。自然の美しさとおもてなしの心が融合した心温まる一日となりました。



城山庵小間でのお点前

当協会会員の中に茶道の先生がいますので、興味のある会員が、じかに手ほどきを受け、いつの間にか数名のお弟子が育っています。本格的な茶会でお茶を点てるという素晴らしい経験もできて、皆様をお迎えするこの日のため、お稽古に精進しています。

(三田村 洋子)

### ——会員研修「神仏習合と寺社建築」——

12月15日(日) 参加者34名

斎藤直人会員が講師である本研修で、日本に根付いていた自然崇拜の神道が、いつ、どのように仏教と融合して行ったのかを学んだ。仏教には寺院、仏像など祈りの対象があったが、神道には存在しなかった。仏教に倣い、御神体が常駐する場所として造られたのが神社だった。そしてその建築方法は、のちに仏教の様式も取り入れられた。建築構造についての学習は、屋根の形など、明治記念大磯邸園の勉強にも紐づけることが出来た。そもそも日本の住宅は、神社建築がベースとなって造られていたのだった。研修以降、散歩中の景色が変わり、家屋が風景の一部から立派な建築物へと変化した。上を向いて歩こう、屋根を見て歩こう。

(戸国 亜紀子)

### ——会員研修「慶覚院見学」——

12月15日(日) 参加者22名

高来神社に隣接する慶覚院本堂で、ご住職からお話を伺った。元々高麗寺の末寺であった慶覚院は、明治の神仏分離によって高麗寺が廃された時、檀家さんらによって隠し守られた複数の仏様がこの寺に移されたという。かつて大磯の下町にあった慶覚院は、明治23年8月の大火により、高麗寺の地蔵堂があったこの地に移されたが、



慶覚院

寺宝は大切に引き継がれた。秘仏本尊の千手観音立像は、12年に1度子年に開帳されるが、2020年はコロナによって延期になり、2024年4月に16年ぶりに開帳された。その時のお姿を思い浮かべながら御前立の千手観音像を拝観した。また、神奈川県的重要文化財に指定されている木造地蔵菩薩像は優しいお顔立ちながら圧倒される迫力である。天台宗の寺院ではあるが、マリア観音像はじめさまざまな仏様、大隈重信母堂が奉納したといわれる曼荼羅も厨子に納められており、「どんなことも聞いていただける」「受け入れていただける」包容力を感じる。本堂で仏様を間近に拝観させていただく貴重な研修の機会となった。

(吉田 昌美)

### ——共催ガイド「ガイドさんと行く大磯！秘密のインスタ映えスポットツアー」——

12月8日(日) お客様13名 ガイド1名

大磯らしい潤いづくり協議会主催により「着地型・体験型ツアー企画」の第一弾として行われた本ツアーは、スマホを片手に、ガイドならではのポイント・構図を紹介し、写真を撮りながらまち歩きを行うものである。川崎裕会員を講師に、普段は何気なく見ている風景や建物、アイテムをスマホのレンズを通して、見てみると、また異なる風景が見えてきた。

大磯駅を起点に、海岸、嶋立庵を経て、明治記念大磯邸園に至るコースであるが、嶋立庵での昼食時には、スライドにより構図の復習を行ったり、普段拝見できない日本基督教団大磯教会では、教会のご厚意により、入場させていただくなどのサプライズもあるなど、お客様にとって実りのあるものであった。お客様からは、「スマホでこんなに多く写真を撮ったのは初めて」「目の付け所が面白い」「写真が上手く撮れるようになった」などの声が聞かれた。



津波避難タワーで撮影

(磯川 寛光)

### ——企画ガイド「左義長を訪ねる」——

1月12日(日) お客様58名 英語ガイドお客様12名 ガイド13名



点火前のサイト

国の重要無形民俗文化財に指定されている「大磯の左義長」は、1月15日の小正月前に北浜海岸で行われる壮大な火祭りである。祭りは12月8日の「事八日」に子供たちがゴロ石を引き回す「一番息子」から始まり、左義長前3日間の七所参り・お仮屋を経て、当日夜の火祭り「セトバレエ」、若い衆が海から引き揚げた木ぞりを引き回す「ヤンナゴッコ」でクライマックスを迎える。ガイドでは、各町内の道祖神を順に巡り、ご神体、お仮屋、道切り、ゴロ石、庚申塔等を写真を交えて紹介した。津波避難タワーに上り海岸に立ち並ぶ高さ10mを超える9基の点火前の「サイト」を一望し、長者町で振舞い酒、ぜんざい、豚汁を楽しんだ後、左義長ビデオを鑑賞いただいた。定刻に今年の恵方(西南西)から点火されたサイトが勢いよく燃え上がる中、お団子を焼いて召し上がるお客様もおられ、勇壮なヤンナゴッコも含めて、堪能して頂いた。さらに今年も外国の方に英語でのガイドも行い、前述の内容に加えて左義長の木札に名前を彫る作業や、ヤンナゴッコのそりの町内引き回しに、引手として参加して頂くなど体験型のガイドも行った。(寺田 啓治)

## 「渋沢栄一と大磯」 奥井 泰弘

昨年7月、渋沢栄一が新壹万円紙幣の「顔」となりました。近代日本経済の巨人である渋沢栄一は天保11年(1840)2月13日、現在の埼玉県深谷市血洗島に生まれました。27才の時に一橋(徳川)慶喜の弟でパリ万国博覧会に参列する昭武に随行して渡欧し、欧州諸国の近代的な産業や社会制度を見聞する中で、日本の近代化の必要性を強く実感し、帰国後に「商法会所」を静岡に設立しました。その後、明治政府で大蔵省の一員として、富岡製糸場設立などに関わります。明治6年(1873)に大蔵省を退官した後、経済人としての活動を開始し、昭和6年(1931)に91歳でその生涯を閉じるまで、銀行、電力会社、ガス会社、鉄道会社、ホテルなど約500の企業の創設と育成、約600の社会公共事業・教育機関の設立や支援に携わり、我が国の近代国家建設を支え、「日本資本主義の父」と称されるようになりました。



出典:国立国会図書館

渋沢栄一は『論語』を徳育の模範とし、「道德経済合一説」を終生唱え続けました。その根幹にあるのは、「仁義道德と生産殖利とは決して別物ではなく、必ず一緒になし得られるものであり、利益のために道理を忘れてはならない」という経営哲学です。この一貫した考えは「論語と算盤」という言葉に象徴されています。

公益財団法人渋沢栄一記念財団がデジタルで公開している膨大な資料である「渋沢栄一伝記資料(以下伝記資料)」および「渋沢栄一ダイアリー(以下ダイアリー)」を検索してみると、渋沢栄一と大磯とのつながりがとても深く、また、大磯を気に入っており、しばしば滞在し、著名な政財界人などと交流していたことを知ることができます。そのような資料の中から興味深いものをご紹介しますことにしましょう。

### 1. 鴨立庵の再建への寄付

明治13年(1880)2月、鴨立沢の旧跡鴨立庵が再建落成し、渋沢栄一の旧友である11世庵主大沢寿道のために尽力したことが「伝記資料」にあります。さらに、2月23日付の大沢庵主から渋沢宛の書簡において、西行御堂・虎御前御堂・草庵の三か所が落成したお知らせ、渋沢の寄付に関する丁重なる御礼の言葉、さらには3月15日の西行祭への御座のお願いが書かれています。渋沢は金2円を寄付しており、大沢庵主が現在の深谷市出身で渋沢と同郷であったことにより長年にわたる交流があったことがわかります。

### 2. 「禱龍館」での滞在と政財界人との交流

明治18年(1885)に大磯に海水浴場を開設した初代軍医総監松本順は、診療宿泊施設「禱龍館」の建設を計画し、自らの出資金とは別に、1口200円で館員(会員)を募り資金を集めました。渋沢栄一、安田善次郎、榎本武揚など34名が会員となりました。会員は無料で一室を借りることができ、病気の時には薬代だけで医師の診療が受けられました。当時の町長の年俸が45円の時代であったことから会費がかなり高額であったことがわかります。「ダイアリー」によると、渋沢は明治23年(1890)1月から明治32年(1899)10月までの期間、幾度も静養のため禱龍館に滞在しています。明治32年(1899)正月には元旦から10日まで滞在し、禱龍館を4日には伊藤博文が来訪し、5日には岩崎弥之助が来訪し、清国漢口近くの製鉄所に対する出資の話をしています。また、同日夕方には岩崎の宴会に招かれ、大隈重信などと一緒に尾上菊五郎の舞を見物し、7日には大隈邸を訪問し、韓国に対する教育のことを談話した記載があり、大磯が政財界人の奥座敷であった情景が目につかびます。



禱龍館繁栄之図(1891年)

大磯郷土資料館蔵

### 3. 渋沢栄一と新島襄との親交と別れ

明治21年(1888)、渋沢栄一は私立大学同志社設立の旨意に賛同し、六千円もの多額の寄付をし、自ら集めた三万一千円もの募金の管理者を務めました。「伝記資料」には、渋沢が新島襄永眠の直前に、大磯で療

養し、病状が悪化した新島をしばしば見舞うだけではなく、東京から名医を招いたことや、新島の死の二日前である明治23年(1890)1月21日にも見舞い、新島は同志社に対する渋沢の好意に深謝し、自分の亡き後も同志社のことを忘れないでくれと懇願した手紙を渋沢に託していた記録があります。

#### 4. 「長生館」での滞在と海水浴

「ダイアリー」によると、渋沢は明治32年(1899)10月から大正2年(1913)1月まで大磯の旅館である長生館に度々滞在しています。明治33年(1900)正月は元旦から19日まで滞在し、元旦に新橋から大磯に向かう汽車の中で、桂太郎陸軍大臣、大山巖夫人、高橋是清らと会い、話をした記録があります。また、同年8月は静養のために、11日から30日まで滞在し、延べ8日、朝食前に大磯の海岸で海水浴をしており、還暦に達した渋沢が自らの健康法として海水浴を積極的に取り入れていたことがわかります。

#### 5. 滄浪閣の伊藤博文への訪問と別れ

「ダイアリー」には、大磯に滞在していた渋沢が時々滄浪閣を訪ね、伊藤博文と会った記録が残っています。滄浪閣に韓国統監に就任した伊藤を明治41年(1908)11月12日に訪問し、日韓瓦斯会社及び韓国の鉱山開発について詳話するとの記録があります。そして、明治42年(1909)6月30日に滄浪閣の伊藤を訪ね、韓国に赴く伊藤と要務を話すとの記録があり、これが最後の別れとなります。渋沢は渡米実業団の団長として米国旅行中のスプリング・フィールドで、伊藤博文がハルピンで10月26日に遭難逝去した報に接しています。そして、翌年3月9日に伊藤公爵夫人への弔問のために滄浪閣を訪問した記録があります。

#### 6. 晩年における大磯滞在

晩年の渋沢栄一は渋沢の三女と結婚した明石照男(昭和10年第一銀行頭取に就任)が所有していた東小磯の別荘に滞在しました。「ダイアリー」には、大正8年(1919)から大正14年(1925)に滞在した記録があり、最後は、大正14年(1925)3月2日に看護婦他7名が同伴して滞在しています。

#### □ 渋沢栄一と大磯松韻住宅地(旧清水家別邸跡)

明治20年(1887)4月、清水店(現在の清水建設)の三代目清水満之助が欧米の建設事情の視察から帰国した直後に34歳の若さで急逝し、清水店は創業以来最大の経営危機に直面しました。長男が四代目満之助を襲名しましたが、当時まだ8歳であったため、三代目の遺言を受けて、第一国立銀行頭取であった渋沢栄一が相談役に就任し、約30年間、清水店における最大の助言者として直接、経営指導を行いました。渋沢の教えである「論語と算盤」を経営理念に置き、経営改革に着手し、顧客第一主義、道徳と経済の合一主義に基づく経営を進めることにより、近代的な建設会社に育て上げます。



晩香廬 出典: 渋沢資料館

大正6年(1917)、長年の相談役を務めた恩義に応えるため、渋沢栄一の喜寿を祝って、満之助は渋沢邸内に洋風茶室「晩香廬」(東京都北区飛鳥山公園内の旧渋沢庭園に現存、国の重要文化財に指定)を贈っています。明治33年(1900)四代目清水満之助は西小磯の土地約5千坪を購入し別荘を構え、西隣りにある八坂神社の建て直しをし、灯籠を奉納しました。この別荘地は「大磯松韻」の名で40区画の高級住宅地となっており、大磯ガイド協会では、春のオープンガーデン開催時において、この住宅地の美しい薔薇が咲いているお庭をガイドしています。

#### □ おわりに

渋沢栄一は多くの会社の設立・経営指導に関わりながらも、財閥をつくらず、軌道に乗れば、世襲から距離を置き、多くの経営者を育て、彼らに経営を任せ、自分は新たな事業に取り組みました。渋沢は、大磯をとて気に入り、晩年まで、静養のためにたびたび滞在していました。渋沢栄一が遺した「渋沢栄一伝記資料」と「渋沢栄一ダイアリー」という膨大な資料を検索・学習していただくと、皆さんもきっと新しい発見ができるのではないのでしょうか。この素晴らしいデジタルデータの森を是非散策してみてください。

(参考) デジタル版『渋沢栄一伝記資料』 <https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/>  
渋沢栄一ダイアリー 慶応4年(1868)から昭和5年(1930)

<https://shibusawa-dlab.github.io/app1/>